

第19回 2013年9月10日(火)

ゲスト 斎藤 努(羽衣国際大学名誉教授)

テーマ 放送史に残る名物番組の軌跡を追う

「わたしと放送」

～ラジオ「ヤングタウン」、テレビ「ヤングおー！おー！」など～

主な内容

- ◎ 「ヤングタウン」の司会 20代の新人「破れたアナウンサー」
- ◎ 「ヤングタウン」とベトナム戦争とフォーク
- ◎ ジックリ型になれなかった 角 淳一と私
- ◎ TBS朝の生ワイド「おはよう700」で海外取材 “考える放送人”に
- ◎ 局アナ全員出演の「あどりぶらんど」を企画、作り手側にまわる
- ◎ テレビは劣化してきた ワイドショーを批判的に検証
- ◎ 「イケダハヤト」 ネットの世界では“神様”のような存在

司会 ご承知の通り一世を風靡しました元毎日放送アナウンサーの斎藤努氏にお越しいただきました。主に「ヤング時代」の話を中心にお伺いしようかなと思っています。これまでの例会ですと、来ていただいた講師の方にまず話をさせていただいて、そのあと質疑に入るというスタイルでしたが、今回以降は会の進め方を変えようと思っています(初めにおよそ1時間、司会者が基本的な質問を行い、そのあと出席者の皆さんから質問をしていただく形で会を進行する予定)。

さて「メディアウオッチング」が始まって今年で5年目に入るのを契機に、これからの活動をどうしようかということで世話人の中でいろいろ話し合ってきました。折角立ち上げましたこの会を継続していくためには、何か大きな目標をもって活動していく必要があるのではないかと考えました。そのためには運営資金が必要ですが、現状の会費で賅っているという運営ではなかなか経費が捻出できない、いくつかの障壁がある中で、高橋信三記念放送文化振興基金に応募してはどうかという案が出てきてまして申請書を提出(4月下旬)していたところ、この度めでたく助成金の給付が正式に決まりました。

助成金給付決定の経緯は文末で記すが、助成金を受けるに当たり申請したテーマは

**『超高齢社会で果たすべきテレビの役割とは
～10年後のテレビ番組はどうあるべきか
聞き取り調査を中心とする考察～』**

民放出身（関西）の放送人の聞き取り調査によって考察するということになります
が、これからそれぞれの局で印象に残る番組を作られた方、携わった方にお話を伺
ったり、当時の自分のおかれた立場とか、印象とか、そういったことを伺ったりし
てそれを記録に残していこうということになりました。今現在そういった経験を
踏まえ、どんな番組を好んで見ておられるか、またこの10年後に放送、テレビ・
ラジオというメディアがどんなふうになってほしいと思っておられるかなどお伺
いすることにしています（これまでのメディアウォッチングで指摘された「今
のテレビはなぜ面白くないのか」という基本的な考え方をベースに置きながら）。
今日はその第一回として斎藤努氏にお越しいただきました。

今日のテーマは

「放送史に残る名物番組の軌跡を追う

『わたしと放送』～『ヤングタウン』『ヤングおー！おー！』など」

“など”というところにこだわってタイトルを付けています。斎藤さんは皆さんよ
くご存じだと思いますが、(ウィキペディアには) 毎日放送のアナウンサー、テレビ
プロデューサーを経て、現在フリーアナウンサー、羽衣国際大学名誉教授、株式会
社ウィズ代表取締役社長。東京都出身で日本大学芸術学部放送学科を卒業後、1966
年に毎日放送にアナウンサーとして入社。2年目の1967年10月に毎日放送ラジオ
で公開収録形式の深夜番組「歌え MBS ヤングタウン」の開始を機に金曜日の司会
に抜擢。その後にテレビの若者向けのエンターテインメント番組「ヤングおー！お
ー！」でも司会を務め、長いもみあげに若々しい語り口で茶の間に親しまれた。今
は死語になりましたが、“お茶の間”という言葉が(ウィキペディアに) 記されてい
ます。その一方、スポーツアナウンサーとして活躍された、このあたりのことはご
自身の口からお話いただきます。

私のように同じ関西に住んでいるアナウンサーにとって「あどりぶらんど」はうら
やましい番組でありました。「あんな番組ができるんだな。うらやましい」と思って
見ていました。

それから「MBS ナウ」のキャスターを務められました。その後テレビ制作局のプ
ロデューサー、専任局長を歴任されて、2002年定年退職後は羽衣国際大学の教授と
して奉職。私がお会いした時には副学長に就任された時でした。学生集めなど大変
なんだと話しておられたのを記憶しています。

さてこれから約1時間、「ヤング時代」の斎藤努さんのお話から伺っていこうと思
います。

元毎日放送のプロデューサー渡邊一雄さんが書かれたご本を見せていただきました。
その本によると、「ヤングタウン」を始めるときに(番組のコンセプトとして) 25

歳以下の若者を対象にする番組である。公開録音にする。それに若者の達成感、送り手と受け手を逆転させるような発想の番組を作りたい。それから“破れたアナウンサー”を使いたいというようなことを記しています。

「破れたアナウンサー」に選ばれたのですか。

<「ヤングタウン」の司会 20代の新人「破れたアナウンサー」>

斎藤氏 「破れてた」んですかね。のちに言われたのですが、斎藤努さんは、これまでのアナウンサーを古いタイプとすると、古いタイプのアナウンサーの最後で、新しいタイプのアナウンサーの最初やなど。確かにアナウンサーの端境期にいました。NHK色というのがあって、きちっとネクタイを締めて、あまり笑顔をつくらず真面目な顔をして前向いてやるという、そういうアナウンサーになりたいとは思いませんでした。

私は毎日放送に入った時に、心に決めたことがあります。「5年間、ノーと言わないことにしよう」今だったら若い人に笑われそうだが、とにかく5年間先輩や上司から言われたことは絶対「ノー」と言わない、そうしないと勉強にならないだろうなと思いました。そうしますと、泊り明けでしんどいのに、デートもあるのに、お前取材に行けとか言われても、ちょっと勘弁してはなしで、ハイハイと言って仕事をやってきました。そうすると何となく気づいたことはある程度の信頼が生まれるんですね。こいつに頼めば「ノー」と言わないで仕事をしてくれる、そして仕事が増える、ということは経験になるわけその分が同期のアナウンサーより仕事量が増えるということで将来に向かって悪いことではなかったと思っています。こんな話を今の若者に言っても、何ですかといわれてしまう。それと本当にアナウンサーをやりたいと思って（放送局に）入ったわけではなかったのです。

毎日放送に入った時に、スポーツアナウンサーしか採用しないとされていました。スポーツアナウンサーをやるかと言われて、ハイハイと受け、やりました。

もともと器用だったと思いますが、野球の実況放送はやったことはなかったのです。それでも7試合球場に通ってしゃべり、練習したら、お前いけるから、いきなり選抜高校野球やれということになりました。

それがスタートラインで、滑舌がいいとか、しっかりしたしゃべりができるという基準はそこでつくったと思います。

そのほかに当初に決めていたことは、5年間何も文句を言わないできちっとやろうということと、もう一つは仕事に対しては、これは終生のテーマになっているのですが、クリエイティビティ (creativity) であること、そして質の良い、良質の笑い、これだけは心がけようと思っていました。これがのちの「あどりぶらんど」(テレビ番組)の誕生につながっていくんだらうなと自分では思っています。「あどりぶらんど」の精神というのはそういう形で作っていたので、それは若いアナウンサーにも

さんさん言い続けました。あの番組が 15 年間続いたのはその精神が受け継がれていったからだと思っています。

最初に戻りますが、スポーツアナウンサーをやりながら、なぜいろいろな番組に関わっていったかといいますと、やっぱりスポーツアナウンサーをやっている時に、クリエイティビティという面で面白くしようという面がありまして、少し演出過剰なアナウンスをしたことがあります。

例えば野球の実況放送でランナーが一塁から二塁へ盗塁する時に、「ピッチャー、第三球を投げました。ランナー走った。ボールはキャッチャーからセカンドに送られた。セカンドに滑り込んでタッチアウト。1センチ5ミリ足りなかった」というような表現をする、そうすると、こういった表現を面白いと言ってくれた人もいるが、お前、無茶苦茶やな、どうして1センチ5ミリ測るんだ、ちゃんと正確にきちんと放送しなければいけないということをさんさん叩かれました。ネット局のTBSからも文句が出たと聞いています。

(こんなことでは) やってられないと思っていた時に、同時進行形で「ヤングタウン」(ラジオ番組) がスタートします。実はこの「ヤングタウン」の始まる半年前に、今話題になった渡邊一雄さん(プロデューサー) からこれまでにない放送をするから練習番組をやろうと誘われていました。わずか15分のラジオ番組でしたが、この練習番組を半年放送しました。その時に何か違う形がないかと思って提案したのが、テーブルに座り、マイクに向かってしゃべるのはやめよう、そして持ちマイクでやらせてくださいと言って(スタジオには誰もいないが) 体全体を使ってしゃべりながら、ラジオを聞いている皆さんに、“おーい聞いているかい” と呼びかけるスタイルで放送してみたのです。それまでの深夜放送というのは「皆さん今晚は、今日もお元気ですか。今晚もあなたの耳の奥までもぐり込んじゃおかしら」といった女子アナウンスの放送が多かったと思います。こんなトーンでは広い意味で若者はつかまえられるということで、マイクを持って(動的に) チャレンジしてみました。偉そうなことを言っていますが、実はその当時、放送とは何かとか、放送が一般の方々に与える影響とは、といったことについては全く頭がなく、ただこの場を面白く、いい意味で受けるためにどうしたら良いかばかり考えていました。これはのちに大いに反省するところで、もう少し深くものを考えながらやっていけば違う形の番組になったか、もう少し程度の高い番組になっていたかもしれません。ただ「ヤングタウン」という番組は、当時流行していたロックとかフォーク、それからお笑いの世界でも吉本興業の若手、桂三枝さんを中心に動き出した時期とうまくミックスして一つの時代の流れをつくっていったんですね。

＜「ヤングタウン」とベトナム戦争とフォーク＞

この「ヤングタウン」という番組がなぜ大きく育っていったかといいますと、やはりベトナム戦争という時代背景がありました。別の意味で世の中に閉塞感が漂っていて、若い人が前に向かって発信したいとか、自分たちの思いを言ってみたくてというのを「ヤングタウン」で吸収していたと思っています。これが杉田二郎とか、ザ・フォーク・クルセダーズ（1960年代後半デビュー）とか、あるいは谷村新司とかこういう世代を生み出していったのです。

杉田二郎 1946年生まれ 京都出身

フォークソング歌手、宗教家

1968年ラジオ「ヤングタウン」の今月の歌に取り上げられたオリジナル曲「あなただけに」が好評を博し、ラジオ放送用のテープが東芝音楽工業からシングルレコードとして発表。

（ウィキペディア）

一方お笑いの世界では三枝さん（桂三枝、1943年生まれ）を軸に、月亭八方（1948年生まれ）、桂文珍（1948年生まれ）、桂きん枝（1951年生まれ）といった人たちが登場し、このステージを大きくしてくれました。

私が心がけたのは、アマチュアの人たちをラジオに出演させることでした。芸は持っていないが、元気のある若者たちの声を電波に乗せたいということで、ロンドンのハイパークじゃないですが、スピーカーズコーナーというのを是非やりたいとプロデューサーに提案、放送時間の遅い部分ならいいだろう、最低15分くらい時間をもらいました。そしてスタジオに来た若者に言いたいことがあれば発言できるコーナーを作りました。これが意外となかなかいい話をする若者がいて話題となりました。とんでもない話も飛び出しましたが、若者が若者を呼ぶという形で発展していった番組でした。

これはのちにTBS東京というのができたぐらいですから、評判を聞いて各局からしょっちゅう見学に来ていました。当時、千里丘放送センターのスタジオには、150人くらいの若者が来て録音スタジオはぎゅうぎゅう詰めでした。

その見学者の中に毎日放送テレビ制作局のプロデューサー（平野さん、林さん）がいて、「これは面白い、テレビにしよう」と言って、テレビ番組になったのが「ヤングおー！おー！」でした。番組誕生のいきさつから言いますと、そういうことになります。

ラジオ「歌え！ヤングタウン」

1967（昭和42）年10月2日スタート

月～土 24：10～26：00 斉藤努（25歳）

1968年から桂三枝（24歳）が出演（木～金）

<24歳の桂三枝 司会陣に 「ヤングタウン」の第一期黄金期>

私は最初「ヤングタウン」の司会を一人でやっていましたが、その次の年から野球中継を担当することになり、週3日「ヤングタウン」あと3日野球中継ということになりました。それまでゲストスピーカーとして出演していた三枝さんが面白いので、週の後半三枝さんをお願いすることになったのです。三枝さんは今桂文枝ですが、彼もクリエイティビティで、創作落語もずっと続けてやっています。新しいものを作り出すということに大変関心のある落語家です。私は彼ほどではありませんが、そういう部分が強かったものですから持ち堪えてきた部分があるのではないかと思います。もちろん制作陣も常に新しい工夫をしようという空気がありました。ルーチン（作業）にしてしまわない、昨日と同じことは放送しないという部分が制作現場にあふれていました。創成期でした。

出席者 渡邊プロデューサーの本を読んで初めて気が付いたのですが、「ヤングタウン」という番組は生じゃなくて、録音していたのですね。

斎藤氏 生になったのはずっと後でした。初めは公開録音でした。一回目の公開録音では人が集まらないので社内にはいた警備担当のおじさんとか、清掃のおばさんとかを動員して、ちょっと集まった学生合わせて20~30人で始めました。しかし2か月くらいでスタジオは超満員になりました。それを半年続けて、私と三枝さんで週の前半と後半二つに分かれて3年くらいやりましたかね。毎日のことなのでスタッフが疲れてきて、これは生放送にしようということでスタジオ生に切り替えたのです。これが第二期黄金期になってくる。最初スタジオに集めたのは、三枝さんと私で第一期黄金期と言われていています。さんま君（明石家さんま、1965年生まれ）とか、あの辺がスターになっていくのはずっとあとのことになります。

司会 先に始まったABCの「ヤングリクエスト」（1966年〜）をずいぶん聞き込まれて、それである番組とは違う打ち出し方をしようとプロデューサーが言われていたが。

斎藤氏 それはその通りです。「ヤングリクエスト」というのは、ラジオのアナウンサーがペアで音楽をかけながら普通のおしゃべりをしていたと思います。イージーリスニングですから多くの人聞いていて、幅も広がったですね。だからターゲットを変えないといけない、ラジオメディアというのはもっとホットだから（リスナーと）タイトな関係を作り出したいというのが当時のプロデューサーの意向でしたので、若者が若者にしゃべりかけるというスタイルを作り出した、

今でいうところのネットの世界に共通するようなものが番組のベースにありました。当時アングラ（アンダーグラウンド underground、実験芸術の類）という言葉が流行していましたが（ラジオは今アンダーグラウンドではありませんが）夜中の放送ですのでアンダーグラウンド的な、今でいう若者が集まるネットのサイトのような雰囲気をラジオが持っていました。これは新しい文化の起爆剤になっていきますのでネットの世界と共通するところがあると最近思っています。

司会 話が少し前に戻りますが、入社した時からクリエイティブなものを作るとか、5年間「ノー」と言わない、そういうような腹のくくり方というのか、腰のすわり方をされていたのはすごいことだと思っています。僕なんかテレビ局に入りたい、アナウンサーになりたいというだけで昭和42年の4月を迎えているんですが、（斎藤さんに）そういう心構えをさせたものは何ですか。

斎藤氏 これは一つに育った家庭、家の事情があるかもしれません。そんなに裕福な家庭で育っておりませんので、大学で一生懸命勉強したかといえばそうではなくて、半分以上アルバイトをしています。TBSとか、報知新聞が当時やっていた電話ニュースだとか、地下鉄の穴掘りとか、そんなことをやっつけて、それで学費を稼いだ部分もありました。当時就職難だったのでとにかく安定させたいという気持ちが強かったですね。もともと東京出身なので関西に就職すると、親はそんなところまで行くか、また当時放送局自体が海のものとも山のものとも分からない部分がありました。しかも毎日放送という名前は関東の人にはあまり知らへんという時代だったので、ほんまに行くんかと聞かれ、「行きます」と言ったのです。だから（すぐに）「帰ってきました」というわけにはいかんやろ、そこで入社が決まったら、どうすればまあまあ将来の芯になれるだろうかと考え、具体的なことは分からないが、根性の部分だけは自信があったのでそのころから二つの目標を決め、胸の内に納めていました。それが「5年間はノーと言わないで仕事をしよう」そして新しいものを作っていかなければ勝てないだろうなということで「クリエイティブ」なものを求めようと考えたのです。そのように決めて仕事をしていた段階で、周りの同年輩、先輩、あとから入ってきた人が、ちょっと生意気な言い方かもしれないが、生温いと思いました。

司会 そのあたりというのは、社内的にやっかまれたり、たたかれたりしたことがありますか。

斎藤氏 ありました。お酒が入った席で、半分包丁を持って追っかけられたことがありました。その時の上司が止めてくれました。普段はそんな素振りも見せませんが、みんな

なが集まる時は、お前ばかり目立ちやがってというようなことがあったんでしょ
ね。それから少し謙虚になりました。

司会 特に野球中継をやるは、「ヤングタウン」をやるはというので、これは仕事の上では
ずいぶん大変だったのではないのでしょうか。

斎藤氏 東京で育ったので、野球はジャイアンツファンでした。甲子園に取材で行ったら、
ジャイアンツはよそよそしいし、ベンチに行っても白けた雰囲気では何しに来たとい
う感じがしたが、一方タイガースのベンチに行ったら、「よう来たな」と（歓迎して
くれて）いっぺんにタイガースファンに変わりました。

しかしスポーツの取材をしていて、体育会系の命令系統のきついやつ、命令はいい
が理不尽なのがある、これは納得できない、これはどこかで足を洗わなければなら
ないと思っていました。そんな時に「ヤングタウン」が始まったものだから、うま
いことすつと抜けました。わざと抵抗した部分もありまして、当時3年目くらいで
次から野球中継をやりたくないと思っていた時、わざとひげをはやし、もみあげも
伸ばしました。テレビの「ヤングおー！おー！」が始まった時期でもありました。
そうすると案の定、計算通りですが、当時部長だった人から「お前、そのひげで高
校野球（の放送）をやるのか」と言われ、「ハイ」と言うと、さらに「純真な高校生
を傷つけるぞ」（と返され）、「それは違うのではないか」と言ったところ、じゃ首に
すると言われ、本当に（野球中継の担当を）首にされてしまいました。
そんなことがあって番組に移っていきましたが、よかったと思っています。

司会 「ヤングタウン」を始めとする若者路線はご自分の中の傾向としては、やっぱりこ
れが合っているなという感じでしたか。

<ジックリ型になれなかった 角 淳一と私>

斎藤氏 どうなんだか、私はあまりものを考えなくて、どちらかというと、フィーリングの
ほうが勝っていたと思います。例えば（毎日放送に）角淳一という人がいたが、あ
の人はものを考えて、スタジオの中でじっくり、じっくりやれる人です。後輩の角
さんですが、こういうやり方は私にはできないと思いました。やはり中身より、フ
ィーリングで行ってしまう、だから勢いとか、テンポとか、そういうことで心より
かたちを重んじる部分がちょっとあったような気がします。ジックリ型にはなれ
なかったようです。しかし作り込むということに関しては誰よりも興味がありました。

「あどりぶらんど」（1984年1月スタート）というのは私が中心になって企画
を考え、編成局と話をして実現した番組です。局アナ全員が出演、特に20代の

アナウンサーが活躍できる場を考え、クリエイティビティと良質なバラエティー番組を目指しました。私は40代、出演する側より、演出する側に回り、企画会議をリードしていきました。アナウンサーから面白い企画が出てきて、これで行こうと決まりかけた時に、ちょっと待て、もう少し考えたらもっと面白くなる、とそればかり言っていました。そんな中から例えば、邦楽と競馬中継を組み合わせるといったクリエイティブな企画も実現し話題となりました。私が制作局に移って、「あどりぶらんど」のプロデューサーを始めたあたりから、紀行もの（どこかへ行って取材する企画）が増えてきて急速に視聴率が下がりました。そうじゃなくてももの作りなので、どこかでいつも作ってないとダメなので、そのことだけは自慢できる部分かなと思っています。

司会 ラジオの「ヤングタウン」からテレビの「ヤングおー！おー！」に移り、一気にブレイクして「ヤングおー！おー！」時代が花開くわけですが、ラジオからテレビへ移行したことで番組への意識、やり方、アナウンサーとしての立場にどのような変化がありましたか。

<テレビ「ヤングおー！おー！」 田辺聖子さんも探訪記事>

斎藤氏 ラジオの「ヤングタウン」というのは、スタッフとも仲が良かったし、いつも前向きに仕事をしていて、それに少ない人数で番組作りができました。ところがテレビに移ったとたんにはこれはスタッフが大勢いて、構成作家とか、吉本興業の人たちまで加わって制作することになります。だからスタッフの中に入って、こちらがこんなことをやりたいと提案してもだんだん通らなくなってきました。

私の言っていた良質でユーモアあふれる番組が、べたな（ありきたりの）方向に行くのでこの部分ではちょっと合わないところもありましたが、それでも足かけ7年続きました。でも本当に面白いと思った時期は2〜3か月くらいしかなかったですね。

ラジオの「ヤングタウン」も面白かったが、のちの「あどりぶらんど」のほうがずっと面白かったと思っています。だから作り込むところに参加できず、出演だけというのはこんなにつまらないかと思ったことがありました。ただ「ヤングおー！おー！」は視聴率を常時30%とるようになったので、やっけていて気分が悪いわけがないのでずっと続けました。しかし私のこういう風にしたいという部分がだんだん欠けていって、マイクを持って客席の中を走り回って次のタレントを紹介するということだけになってきました。これ以上やっていられないと思っていた時に、TBSのほうからJNNのあさの生番組に出演しないかとの打診がありました。これは“渡りにシブ（船）”、ちょっと行ってしまいました。

出席者 あれ、何年くらいやっていたのですか。

斎藤氏 約束は1年半でした。昭和51(1976)年から52年まで2年間に延びました。あとは毎日放送に帰ってきましたが、時々TBSに行って番組に参加していました。あのころは結構フリーにならないかの誘いがずいぶんありましたが、当時の編成局長から「フリーになるんだったら、絶対に行かせない」と言われていました。フリーになる気もなかったのですが。

この朝のJNN生ワイド番組(「おはよう720」「おはよう700」というのは、ディレクターと一緒に海外に行って現地取材するのですが、次のコーナーをどうやるのかカメラマンを含めて考えながら撮影していくので大変楽しい仕事でした。言われた通りに、こうやってこうすると指示されるんだったら面白くなかったと思います。

司会 かなり自分で納得しないとしょうがないという性格ですね。

ここに作家の田辺聖子さんが「週刊朝日」(昭和44年11月28日)の特派記者として初期の公録会場(「ヤングおー！おー！)であったうめだ花月劇場を取材した“上方ポ”が「毎日放送40年史」に転載されているので紹介します。

「カメラが向けられてもマイクが向けられてもおめず臆せず—このおめず臆せず—というか、臆面もない若者が何とふえたことよ—イチビル若者たちのヒモのほどけたような顔、顔、三枝の動きや、しゃべりに現代の若者のリズムが合致したのはわかる。しかしこの笑いと楽しみは、青春のそれとしてはどうも物ぐさな気がする。自分のコトバがないのだ。自分で考えない。だから“おもしろーい！”にすべてを盛り込んでしまう。自分のそれを託して、事をすます。おめず臆せず、ためらわず、臆面もなくウジウジしないという彼らの感覚が、成長して社会人になった時にどういう形ででてくるのだろう」

(田辺聖子さんの「ヤングおー！おー！」探訪記事の一部)

(ちなみに番組のスタート時の出演者は、桂三枝、斎藤努、笑福亭仁鶴、横山やすし、西川きよし。その後コメディNo.1、中田カウス・ボタン、ザ・パンダ、桂文珍、月亭八方、林家小染、桂きん枝、オール阪神・巨人、明石家さんまとつづく)。今をときめく大御所になった人たちが大勢出演していました。そういう人たちとやっておられた時はどんな雰囲気、ムードでしたか。写真を見ますと斎藤さんはもみあげスタイル、長髪スタイル、若者の代表みたいな感じになっていますね。

斎藤氏 勢いがついたら止められないということがあります。橋下維新みたいに。

だから、いい悪いじゃなくて、今挙げたタレントさんたちというのは番組をよくしようというより、自分の出演する部分がどうやったら面白くなるか、自分はどうか受けるか（を考えていたのではないか）タレントさんだからしょうがないと思うのだが。制作サイドはそれをどうまとめるか、そのことが中心になっていたように思います。私はその中に入ってクリエイティブな要素を入れるとかといったチャンスもなく、それをやると壊れていくのかなという思いもありました。だからまとめる方向にまわったということです。

ちょっと最初のころだったが、これを言ってこういう風にすればより面白くなるかなと思って、マイクを持ってしゃべったりして時間をとると、誰とは言いませんが、三枝さんではありません、当時の大御所、吉本興業のタレントさんに「あんた目立ちすぎや 浮いてるで」としょっちゅう言われました。

私が浮くことは番組を壊すことなのかなと一瞬思ったのですが、彼らの機嫌を損ねてまでやることはないな、それ以降、番組全体トータルで見て、局のアナウンサーに徹して行こうと考えを変えていったのです。

司会 「ヤングタウン」を始められたころの斎藤さんと「ヤングおー！おー！」に関わってきた斎藤さんとは意識の上でどうだったのか、相当変化しましたか。

<TBS 朝の生ワイド「おはよう700」で海外取材 “考える放送人”へ>

斎藤氏 相当変化してますね。やっぱりどこかで作り手側にまわりたい、ほかのセクションで仕事をしたい（という気分になってきました）。実は「ヤングおー！おー！」の終わりころは自分自身でどこへ行くべきか、迷っていた時期でした。ものもあまり考えていなかったし、雰囲気だけで生きている世界でもあるので、これはアナウンサーというのは、これが限界かなという思いを抱いた時期でもありました。

フィーリングだけで生きてきた私が自分自身でも大きく変わったのは、JNN 朝の生ワイド「おはよう720」「おはよう700」に携わったことでした。この番組を担当した時、海外取材を山ほどしました。実際に取材した国は十数か国ですが、国自体は四十数か国歩いています。この番組で起用されていた女性のリポーターというのはロンドン、パリ、ニューヨークと、いいところばかりでしたが、私が行ったのは、戦地、ジャングル、発展途上国が多かった、エジプトなども行きました。そこで人々の生きざまというか、人々の日常を見て、自分たちの暮らしと比較するわけで、そこで初めてものを考える人間になっていきました。一番考えさせられたのはアンゴラ。当時ポルトガルから独立したばかりの国で、取材中も銃弾がどんどん飛んでくる内戦状態でした。のちに行った北朝鮮。私はまだ 30 代半ばでした。ぎりぎりで生活している人々に接すると、いろいろなことを考えさせられました。宗教のこと、国家とは何か、人間って何だろう、家族についても改めて考えました。

そこから番組を作る姿勢とか、放送するうえで何が大事か、若い時には考えなかった部分が芽生えてきたのはこのあたりからです。

司会 「ヤングタウン」「ヤングおー！おー！」を通じてその当時の若者についてお伺いしたい。多くの若者に接してこられて若者の生態というのを見てこられたと思うのですが、そのころ感じておられた、自分よりもちょっと若いかなと思われる当時の若者について、今振り返ってみてどんな印象であったか（お聞かせください）。

斎藤氏 いろいろなパターンがあります。大きなものに巻かれてしまって与えられた楽しさとか、喜びだけでいいと言う人もいますが、今よりもはみ出す若者が多かったと思います。自己主張が今よりもっと強い、時代背景というものがありますので、スタジオでいい加減にやり取りすると突っかかってくる若者は当時のほうが多かったと思います。今の若者にはそういう要素はないような気がします。去勢されているというか、いわゆる肉食じゃなくて草食男子みたいな感じ（当時はそのタイプの人はいなかった）、みんなやっぱり自分たちで生きていかなければいけないと相当強く思っていたので根性がありますよね。

音楽をやっていた連中もそうですね。とにかく適当なところで投げ出すというのがない、そういう人たちが多かった。

司会 番組自体もそうですし、そういった番組に参加していた、例えばフォークの皆さんもそうですし、売りたいという気持ち、有名な番組になってほしいという気持ちはあったと思う。その当時というのはどちらかといえばぎらぎらの野心というのはなかったでしょうね。作り方としては。

斎藤氏 これは時代を超えて人によりけりだと思います。第一に自分の好きなことをやっていて、その延長線上で売れるようになったというよりは、売れないと思ってやっていたほうが多いですね。谷村新司が典型です。彼はリズム感が弱かったのでスタジオでギターを弾く前に、番組が始まる前、終わってからもギターを弾くのではなく、リズムをとる練習をしていました。“ツッタタ、ツッタタ、ツッタタ”こればかりやっていました。それができるようになってから本当にギターを弾き、歌をうたうという感じでした。趣味の延長線上でやっているということではなくて、将来の生活の糧にするということが明確に見えていたのが当時の若者じゃなかったかなと思います。桂三枝さんも不遇の時代がありました。どうやったら受けるか、笑わせることができるか、常に「三枝ノート」を持っていて、テレビを見たり、ラジオを聞いたり、人がしゃべったりしておもしろかったり、気に入ったりすることがあれば全部メモしていました。それがのちになると、ノートパソコンをゴルフ場

まで持ち込んで、何か面白いことがあればパソコンに打ち込んでいました。そういう努力家の人が大きくなっていったんだと思います。

司会 ショットの打ち方ではなく、ネタになると思われることを即座にメモしていたんですね。

斎藤氏 三枝さんはゴルフがあまり上手じゃない、60台をたたきますから。

司会 次に「あどりぶらんど」のことですが、番組誕生のきっかけは何ですか。

<局アナ全員出演の「あどりぶらんど」を企画 作り手側にまわる>

斎藤氏 これは大変口幅ったいことを申し上げますが、当時あの毎日放送アナウンサーで世間に名前が知られている人というのは、小池清さんと私くらいしかいませんでした。そうするとルーチン（日常業務）でやっているニュースとか、天気予報、スタジオでコマーシャルを撮るなどの業務で追われているアナウンサーが多い中、私はそれをあまりやらずに（特定の）番組に出演しているわけです。まあ実力の世界というのは、みんな分かっているのであまり言いませんが、やっぱり自分ばかりいい思いをしゃがってという感じが言葉の端々に出てくるんですよ。

それでは毎日放送のアナウンサー室としてはマイナスですから、みんなが全員で出演し、楽しい、いいものが作れないかと考えました。これが（「あどりぶらんど」誕生の）発想の原点でした。自分だけいい格好をするわけではありませんが、本当にそう思ったのです。日常酒を飲みに行ったり、歌をうたいに行ったりして感じていたのはアナウンサー室にはタレントよりもユニークな面を持った人（近藤光史、松井昭憲ほか）がたくさんいるということ、しかし番組に出演できる機会に恵まれていませんでした。面白い人がたくさんいるが、アナウンサーというのは基本的には色が一緒ですから、なかなか色を分けて使うのが難しい面がある、それは演出で何とかカバーするというので、いよいよ編成局と交渉に入ることになりました。編成局にはアナウンサー出身の編成マンがいて、アナウンサー室の動向には興味をもっておりました。その彼に、私は自分の思いを述べ協力を求めました。そして正式にフォーマルな企画書を提出することになり、それが認められ番組がスタートすることになります {昭和 59 (1984) 年 1 月 25 日}。

番組のコンセプトについて「毎日放送 50 年史」は
「タレントに比べた場合に、アナがやや苦手とする
“アドリブ” をテーマに、局アナが全員出席し、アナ
の個性や魅力をひき出そうというのが番組のコンセプト
であった。テレビの「花形」となっていたタレント

芸能人にたよらずに、アナだけで番組を成立させる
という考えは当時の常識からは外れていた」

と記している。

最初は当時のアナウンサー室の小池清室長は賛成してくれましたが、それに続く人たちは大反対でした。忙しくなるだけで、そんなもの面白くなるわけがないと。（社内を含めて）反対の声が強い中、その反対を突っぱねて番組が始まります。アナウンサー室全員参加、ほかの番組に関わっていて、「あどりぶらんど」の収録に間に合わない人を除いて、宿直の人、宿明けの人を含め例外なしにアナウンサーは全員出演するという決まりを作りました。

制作体制を整えました。アナウンサー室の中にいくつかチームを分け、アイデアを出すチーム、アイデアを集めさらに磨きをかけるチーム、私がこのプロジェクトチームの座長になり、制作局とアナウンサー室の合同で企画、演出を練りました。企画を考えるチームがもみにもんで、“へえ（驚き）”“なるほど”とうならせるくらい企画を絞り込んでいきました。企画提案の際、“へえ”と言わせて“なるほどで占める”この二つの条件を満たさない企画はとことん詰めていき成功へと導いていきました。

最初、背を向けていたアナウンサーも自分たちが出演し、それなりの視聴率が上がってきて評判がよくなると、積極的に番組に出演するようになってきました。自慢話ばかりしているようですが、素直に言っているつもりです。

司会　　そういう話をずいぶん伺いたいと思っていました。外部から見ているとそういったご苦労よりも演出というか、制作局が作って、アナウンサーが出演しているだけの番組ではないだろうかと思っていました。「あどりぶらんど」登場後、アナウンサーのみなさんの意識とか、それ以外の仕事への関わり方は変わってきましたか。

斎藤氏　ほかのアナウンサーが出演するそれ以外の番組といってもそれほどなくて、のちに「ちちんぷいぷい」のようなワイド番組がスタートするようになって、「あどりぶらんど」で磨き上げたものがそういったワイド番組で花開いていったのかなと思ってます。当時「あどりぶらんど」と並行してアナウンサーが頑張れるところと言えば、ラジオかニュース番組ぐらいしかなかったが、取材とカリポートといった面でずいぶん力がついたといえるでしょう。

アナウンサー室が中心になって「あどりぶらんど」という番組を制作するに当たり、絶対やらないことを一つ決めました。それはアナウンサー芸を見せること。本業の競馬実況中継をやること、それはいいのだが、例えば歌をうたうとか、ちょっとだけゴルフがうまいからゴルフを見せるとか、つまりアナウンサーが〇〇をやっただけ見せるだけは絶対させなかった、本当のプロはもっとスゴイわけだからアナ

ウンサー芸、これはご法度にしました。

司会 お話を締めくくる前にアナウンサーから作り手側、企画する側にまわられたが、このあたりの踏ん切りはつきましたか。私の場合、人事異動でアナウンサー21年目に突然報道に行けと言われたのですが、斎藤さんの場合はどうでしたか。

斎藤氏 私の場合はアナウンサー生活がほぼ終わりかけで、TBS から戻ってきてそんなに活躍する場もなかったということもありますが、TBS では海外取材のあとは比較的時間があつたので、全国ネットの有線大賞の司会をやったりしてアナウンサーとしていろいろ経験しました。

当時まだ「ワイドショー」のメインの司会者みのもんたのようなああいう世界がなかったものですから、どうするかなというのと、もともと、ものを作るほうに強い気持ちがありましたので、制作局の渡邊プロデューサーからそろそろ制作局へ来いやという誘いがあった時、すつと行ったという感じでした。

司会 のちに私はシンガポールで斎藤さんとお目にかかることになります。東南アジアで「アジア音楽祭」を開催するに当たりシンガポールで記者会見があり私も取材しておりました。大阪の放送局でありながらアジアを舞台に音楽祭を開くというグローバルな展開をしていたのですが、やっているご本人はどうでしたか。

<「アジア音楽祭」 舞台裏でイベント開催の苦労体験>

斎藤氏 「アジア音楽祭」という名前でアジア各国を回りながら、地元のトップシンガーを集めて音楽祭を開くというイベントでした。日本からは谷村新司をメインに出演を依頼、谷村さんは「ヤングタウン」の時代からお付き合いがあり、アジアでも「昴」が大ヒットしていましたので谷村新司さんに行ってもらいました。

開催地はシンガポール、マニラ、台湾、香港、マレーシア。その当時それぞれの国としては国際的なスケールの音楽祭を開催したことがなく実は、ほとんど費用は毎日放送が出してスポンサー（三洋電機ほか）を付けて実施しました。昭和63（1988）年に始まり、平成9（1997）年まで10回開催。

この「アジア音楽祭」のもともとの発想は亡くなられた斎藤守慶会長でした。私は途中からプロデューサーのほうを全部任されまして、ステージ周りなど演出は私が担当、商売のほうは事業局が仕切りました。各国との交渉に当たり、これまでの世界各国での取材経験が生きてきました。それでも国情の異なる地での開催だけに一部の国で苦労がありました。特に上海とベトナム。上海というのは当時まだ兌換券のあったころで、経済も開放経済の前でした。メンツばかりのところですから、これを動かすのは難しく苦労しました。（アジアで）日本人の歌手が日本語で歌うと

というのはどういうことかと谷村新司が言うので、歌詞を中国語に訳すよう頼んだところ、「目を閉じて、何も見えず」というのは、そんなもの当たり前じゃないかというような話になり、そうじゃなくてと、いろいろ説明しながらやり取りしているうちにOKしてくれるというちょっとした騒動がありました。上海の中国のエリートというのはすごいですね。こちらが決めてこうなりましたと言って合意したら、パーフェクトの仕事をしてくれました。途中で余計な金を請求されることもありませんでした。

無茶苦茶苦勞したのがベトナムでした。追加請求などお金には厳しい国です。前日まで開催できるかどうか分からない状況でした。会場にちゃんとした電源がありませんので半年前から電源車を依頼していたのに、前日のリハーサルの時に電源車が来ていない、そこでさんざんやり取りして、ようやく電源車（ロシア製の中古車）が来たものの、今度は会場と電源車を結ぶケーブルがない、といった不手際がずっと続いていました。いろいろありましたが、音楽祭は開催できました。ということで（日本では考えられない）経験もしました。

「アジア音楽祭」はアジアの人たちにとっては非常に大きな位置づけだったと思います。どの会場も超満員でした。驚いたのは音楽祭の翌日、会場（ベトナム）での音源がCDになって道端で売られていることでした。

司会 1994（平成6）年ごろからフジテレビが「アジアバグース」という番組を始めます。シンガポール、マレーシア、インドネシア、香港からそれぞれの国の予選を通過したスターのタマゴをシンガポールに集めて、そこでアジアチャンピオン（勝ち抜き方式）を決める、そこから世界に通用するスターを輩出していくという番組をフジテレビが始めたのです。それも「アジア音楽祭」というのが大きなインパクトになっていたと思います。フジテレビの関連会社共同テレビがこの番組のためにクアラルンプールに支局を開設したのです。さてそういったさまざまな経験をされた斎藤さんは今どんな番組がお好きで見られますか。

<テレビは劣化してきた ワイドショーを批判的に検証>

斎藤氏 （好きで）テレビを見るということはあまりありません。

主に報道番組はきちっと見ています。どうしてもBSにチャンネルを合わせてしまう、あるいはスポーツ中継、これに時間を割くことが多いですね。あとは仕事として見ています。ワイドショーです。4、6、8、10の各チャンネル、毎日放送しているのでどちらといえばダメなところを中心に、かなり批判的に見ています。なぜそうなるかといいますと、今のメディア、テレビのあり様というものが、私が携わっていたころよりもずいぶん変わってしまって、一言で言えば劣化した部分が強

と思うのです。クリエイティブというのはその部分、部分で斬新な部分を見せる、テレビ全体をトータルでクリエイティブにしているかとなると小手先だけで終わっているな、特にワイドショーというのは。ちょうど小泉（政権）改革のころ、そのときに、みのもんたのTBS「朝ズバッ！」がほぼ同時にスタートしています。

◎小泉第一次内閣 2001年4月26日～2002年9月30日

小泉第三次内閣 2005年9月2日～2005年10月31日

◎みのもんた TBS「朝ズバッ！」

2002年毎週土曜日放送「サタデーずばっと」の好評を受け

2005年3月28日 月～金朝5:30「朝ズバッ！」始まる。

小泉純一郎内閣というのは発足時の支持率が85%を超える数字を出していて、テレビ各局は小泉ブームにあやかろうと、毎日毎日テレビに取り上げました。見ている人たちに批判する力をなくすくらいの勢いでした。これが橋下現象（知事・市長）に続いていくわけですが、これは私たちが今までつくってきたテレビとは違う世界のものが出てしまっているな、少し恐ろしさを感じている部分があります。ちなみに現在各局とも朝6時くらいからワイドショーが始まって、夕方7時台のニュースが終わるところまで、4チャンネルで見ると朝6時から夕方7時まで13時間のうち11時間くらいはワイドショーですね。朝日放送も多いですが、読売テレビ・日本テレビ系もニュースかバラエティーか分からない情報番組を10時間以上放送しています。これは健全な世界なのか、常を感じています。

私の後輩の平松邦夫氏を大阪市長に推す時に一生懸命運動した時期があったのですが（一期目はそう感じなかったが）二期目の橋下さんとの戦いの中では、やっぱりテレビメディアの追いかける目的というものは将来の日本をよい方向に導くというようなものではなく、その場限りのものを切り取っては面白おかしく見せるという方向に報道マンまで走ってしまったのか、そんなことを強く感じています。このことは私より上の先輩はずで感じているのではないのでしょうか。

出席者 「ちんぷいぶい」の総合司会をしていたパーソナリティーに聞いたことがあります。彼は「橋下さんを出来るだけ出演させよう」とスタッフに言っているというのです（視聴率を上げるために）。それはとんでもないことと私は言ったのですが、彼には（とんでもないという理由が）分からなかったみたいですね。

<私のころには「社員教育」はなかった メディアとは何かを考えよう>

斎藤氏 確かに視聴率競争というのが大きく影響しています。この20年くらい経済的にも成長していないので放送局もしんどいことは分かるのですが。

一番大事なことは、私が入社してから毎日放送を退職するまで、メディアとは何か、

メディアリテラシーも含めて作る側が一般に与える影響などについて、会社の中で学習する時間がほとんどありませんでした（スケジュールを組み教えていく、あるいは研究する）。報道局はやっていたのか分かりませんが、それ以外のセクションはそういった社員教育はなかったと思います。ワイドショーなどのスタッフがメディアの影響力など考えずに面白おかしく作っていく、そういった姿勢、風潮が一番気になります。

のちに私は大学に籍を置くことになりますが、学会などに出席しまして議論していく中で、メディアが一般社会に与える影響力、国際的な視点、視野の広いメディアの見る目といった姿勢が今の作り手側になくことに初めて気づきました。

私自身は何となく世界各地取材している中で、そういう部分は心の中にあっただが、系統的に勉強してみようというところまで深めていませんでした

放送局、新聞社もそうではないかと思うのですが、もう少し放送局の姿勢、新聞社の姿勢として、こうだという部分を教育方針として打ち出さないといけないのではないかと考えます。

出席者 勉強というほど大げさなものでなくて、毎晩ニュースが終わってから仲間たちと酒を飲みに行く機会があります。その席で話になるのは、どういうことか（ジャーナリズムとは）という話ばかりしているはず。そういう話はある程度できていたと思うが、今の報道の人（50歳代）に聞くと、さらに若い人は自分たちと考え方が違う、例えば平松批判はともかくとして、橋下批判はすべきでないという発言が公式の席で出てくる、だから今の若い人たちは自分たちと立ち位置が違うくらいのことじゃなくて、もっと人種が違うんじゃないかという感じがします。

斎藤氏 リテラシー教育が小学生くらいからきちっと行われておれば、そういうことにならないと思うが、ゆとり教育世代がそろそろ卒業していく時代ですから、やっぱり人種が違うのでしょうか。

こういうところで建設的なことを言ってもなかなか伝わらないので、システムとしてそれを研究し、勉強する部分を少なくともキー局、準キー局、あるいは四大新聞というのはちゃんとやるべきだと思います。

司会 この会（「メディアウォッチング」）が立ち上がったきっかけは、今のテレビ局に対して非常に大きな疑問をもっている人たちが集まり、メディアについて話し合いを始めたことからです。その中でテレビメディアというのは果たしてジャーナリズムであろうかというテーマが毎回課題としてあがり議論しています。今日残念ながらお越しにならなかったが、会員の中に「ちちんぷいぷい」で橋下番のリポーターがいて毎日のように橋下さん（知事時代から）の動向を伝えるのはほんでもないこと

だと言いつけている人がいる、そして毎日放送はどう考えているのかという疑問をいつも心の中に持っていて、この会に参加しておられました。

私も会社に入った時、志のあるちょっと上くらいの年代の人たちと、放送とは何か、テレビとは、といったことについてよく議論したことがあります。今はそういったことを発想すること自体なくなっているのかもしれない。

齋藤氏 1年くらい前、民放の制作者が集まって、テレビのあり方をテーマにシンポジウムが開かれ、各局のプロデューサー、ディレクター、記者が現場からの報告をしていました（「テレビの未来と可能性～関西からの発言」、2012.10.20）。あのシンポジウムを聞いていて、もう少し建設的な、あるいは反省も含めた部分があればよかった、現場の苦労話に推移しているような気がしました。パネリストの中にメディアウオッチングをしてきた学者の方とか識者をきちっと入れて、現場の意見とすり合わせるような部分が必要だったのかなと思っています。

司会 といった話を踏まえて、齋藤さんご自身としてはこの先10年後の放送がどうあってほしいと思っておられるか、社会も変わっているでしょうし、それこそ7年後に東京オリンピック開催が決まりましたが、テレビ放送、ラジオ放送のかたちもこれまでと違ったものがでてくるかもしれない、10年後の放送、テレビというものがどうあってほしいと思っっていますか。

<10年後のテレビ 少しずつ修正して、自然になるのを待つ>

齋藤氏 これはどうあってほしいのかではなくて、自然になるのを待つのかなと思っています。メディアというのはいっぱいあるが、新聞だったら110年の歴史がある、ラジオでしたらすでに80年、90年の歴史、テレビでも60年になる、こういうメディアというのは、批判はありますが、一応世の中から信頼されています。これは戦争も知っているし民主主義も知っている、貧困も知っているし政界のドタバタ劇も知っている、やっぱり培われた経験があつて先ほどから批判はしているが、とんでもない形で踏み外した部分なかったのではないかとまだまだ思っています。だから経験の順から信頼性が高いという部分がかしたらあるのではないかと考えます。

今ネットの世界が話題になっているが、日本にホームページが出来たのは今から20年くらい前ですか。

日本最初のホームページ

1992年9月30日、文部省高エネルギー物理学研究所
計算センター 森田洋平博士が発信（ウィキペディア）

そこから22、23年の間にこんな世界になっている、混乱があつて当たり前でしょ

う。これではいけないということで淘汰が始まっているし、30年、40年、50年経った時に初めてどこを信頼しどこを信頼すべきでないかということがネットの世界でも分かってくるのでしょね。そんな中で少しずつ修正されて将来の世界が出来てくるわけですから、今将来はこういうかたちにすべきだというのは理想論にすぎなくて我々の力ではなかなか難しい、その都度その都度修正していかないと（かたちは）出来てこないと思います。

ただテレビのように劣化する方向がありますから、それは引き戻さないといけない、劣化がもっと進めば消えてなくなってしまう、完全にネットに吸収されてしまうという状況にもなり得る、20年先、30年先どうなるのかと問われれば、信頼されるものだけが生き残れるということになるのでしょう。

司会 その中で先ほど触れられたが、メディアのあり様といったことを、どこかの段階で立ち止まって、誰かが考え始めるということが大事かもしれません。

斎藤氏 これは国家プロジェクトにすると難しい、そうすると権力が入ってくるから難しいですね。

司会 こういう時代が来るかどうか分からないが、本当にどこもかしこも視聴率が悪くなってどうしようもないところまで落ち込んでくる、そういう時代が来ると思いますが、来てから考えるかな。

斎藤氏 経済の原則ですから誰も見なくなれば、スポンサーがつかなくなるので、どこかで野垂れ死にになってしまうわけですね。みんなが見るところ、見るところへ流れていくので、その方向性だけはちゃんとするという、みんなが見抜く力を身に付けておくことが必要でしょう。

司会 私のほうでお伺いすべきことはこんなところですので、皆さんのほうからご質問、ご意見ありましたらお願いします。

出席者 10年後のテレビのかたちという話に関連してもう少し絞って、高齢者とテレビという観点から何かご意見がありましたらお聞かせください。

<高齢者メディアを特化 テレビはもっと“すみ分け”を>

斎藤氏 私も高齢者ですので。高齢者の方はワイドショーを楽しみで見ている人が多いように思います。ワイドショー自体も高齢者を意識した作りの部分がずいぶんありクライアントを見ているワイドショーのある時間帯になると年寄り向けのスポン

サーのほうが多くなる、若い人から年寄りまで家族そろってテレビを見るというスタイルは終わっているのですね。

高齢者メディアに特化するほうがいいかもしれない、一番思うのは、テレビはすみ分け出来ない、出来ているようで出来ていないということです。4、6、8、10チャンネルが同じ時間帯に同じような内容のネタを放送している、4チャンネルはワイドショーをやってくれて、6チャンネルはもう少し違う方向のドラマなどを編成するように分けてくれるといい、四つの放送局とも同じ方向にならないように考えてほしいですね。

高齢者の見るテレビって何ですかね。健康増進とか、長生きするための番組とか、そんな風になりますよね。我々ゴルフをしても、ゴルフの話より健康の話のほうが多いもんですから。そういう年寄りチャンネルがあってもいいかもしれません。

司会 どこかの局がいち早く気が付いて高齢者の志向を取り入れた番組作りに特化していくと、そこが勝っていくのかなと僕なんか勝手に想像したりするのだが、そのことが分かっているけどなかなか踏ん切りがつかない、そして時が流れていく、ジレンマじゃないでしょうか。

出席者 逆に F1（20～34歳の女性）、F2（35～49歳）とか言っているじゃないか。

司会 大学で若者たちに教えておられましたね。そんな話をしたことがありますか。

<「イケダハヤト」 ネットの世界では“神様”のような存在>

斎藤氏 若者もいろいろいますが、結構テレビを見ないですね。ネットの世界にはまり込んでいます。

ネットの世界で今、私が非常に興味を持っているのが一つありまして、それが若い層を巻き込みつつあります。今の若者たちはこの20年間ずっと経済も成長していないし、就職もうまくいかない、ということはどうやって生きていけばよいか、若い人たちはそれなりに必死になって考えています。

ここで二人の人物を紹介したい、イケダハヤトという人がいる、それに高木新平という人がいる、この二人は今ネットの世界では神様のような存在になっています。新しいコミュニティーをネットの世界で作りつつあります。イケダハヤトさんというのは昔の総理大臣みたいですが、ネットの上ではカタカナでイケダハヤト（1986年生まれ、早稲田大学政治経済学部卒）として知られています。この人たちというのは経済動向に流されないで年収200万円くらいあれば、一家4人ちゃんと暮らせるということをネットの世界で公言しているのです。どうするかと言えば物々交換です。冷蔵庫が古くなったので誰かこれと交換してほしいと（ネットで）呼びかけ

るとすぐ集まってくるので新しいものはいらぬ、シェアハウスで生活したりしてこんな便利なものがありますよと交換する、大企業が新しい製品をどんどん作って経済を刺激しようとしてもそんなことは無関係に生きているのです。これは今まで日本に出てこなかった新しいコミュニティーのかたちになっていて大変注目しています。このコミュニティーがもっと大きくなると、経済活動一本道だった経済優先の古い考えを持った人たちとはぜんぜん関係のない新しい世界が出来上がることになるでしょう。私のところの大学の学生も何人かそのサイトを見ていてずいぶん面白がっている人がいました。イケダハヤトという人は大きな会社に就職して1年ほどで退職しています。(著作「年収150万円で僕らは自由に生きていく」2012年発行、星海社新書)。イケダハヤト、高木新平、この二人の名前を覚えておいていただければ新しい若者の考え方みたいなものが分かると思います。イケダハヤトは私が開いたシンポジウムにパネリストとして呼んだことがあります。一緒にパネリストとして参加した内田樹さん(神戸女学院大学名誉教授)が感服して、これはね、私たちの出る幕じゃない、新しい日本は君らがつくっているな、それくらい面白い人ですねと話していました。そういう世代が育っていますので、ネットの世界で新しい日本の潮流みたいなものが出来はじめているように感じます。

司会 その人たちはテレビなしの生活でしょうね。ネットだけなので、それに際立った物欲もないでしょうね。

斎藤氏 物を次から次に買う、シャネルだ何だといったものに何の価値観も見出さない世代として育っている、自動車は要らないと言っています。

出席者 出世したいとか、金持ちになりたいとか、物欲とかない世界に生きている人たちなんでしょう。

斎藤氏 新しい製品があつたら人生が豊かになるということを考えない人たちです。だって我々のころは昨年より今年、今年より来年と給料が上がっていた時代です。だから買おう、買おうという感覚になりますが、今の時代はずっとベースアップがないのでお金が入ってこない、どうやったら楽しく過ごせるかということを考えると、今言ったような暮らしになっていくわけです。(彼らの生き方は)それはメディアに与える影響は非常に大きいと思います。テレビは見ませんから。

司会 ちょっと想像がつかえません。そういう人たちはどういう志向で、どこへ、どんな風に生きていくのか、人生を終えるのかを考えると想像がつかない世代です。

斎藤氏 別件で大手電機メーカー（東京）の営業企画部の幹部らと話をする機会があって、びっくりしたのは知っているんですよ、イケダハヤトを。この辺の話を知っているんです。日本の企業とはやっぱりすごい、情報としてすでに入っていました。

出席者 ちょっと前の話に戻りますが、今のテレビが劣化しているということで、特に午後のワイドショーを中心とした番組をかなり分析されているようですが、一番気になることを挙げてもらえますか。

斎藤氏 問題をかかえる事象があっても検証しない、例えば7年後の2020年に、東京オリンピック開催が決定した時の報道を見ても、「決まった、決まった」の一色で流れてしまっている、今になって新聞も放送も少し汚染水の問題などについて、これからの課題として批判的に伝えていますが、そんなに突っ込んでいかないのではないか、そういう部分が不満です。

出席者 NHKの番組で東京オリンピックの組織をどうするかの話の時に、コラムニスト天野祐吉さん（雑誌「広告批評」創刊）が言っていました。今の日本はすべて経済優先で動いている、経済が文化になってしまっていると批判しています。

斎藤氏 おっしゃる通りです。

出席者 「なるほど！ザ・ワールド」（フジテレビ）で原始的な暮らしをしている土地を取材している映像記録を見ましたが、インタビューを受ける酋長なり、土地の年配者の眼がみんなキラキラしている、いい顔しているんです。そしてちゃんと哲学を語っているんです。高等教育のようなものは多分受けていないにも関わらず生き生きとした人間を感じるのです。ところが日本の政治家なり、財界人なりがテレビに出て話していても心に打つものを感じない、右肩上がりの成長しか考えていない経営者が多い、先ほど斎藤さんが触れたイケダハヤト氏ら新しい生き方を模索する若者の中には、経済成長だとか、金だとかそういう物差しというのは全くないと思います。しかし彼らは200万円の収入でも心は豊かである、ネットの世界、アンダーグラウンドの世界である、それが昔の江戸庶民の生活だった、日本の古き良き文化の中にはそういうものが脈々とあった、それが急速に失われつつある、一体どこでだれが歯止めをするのか、そんなことを感じます。

斎藤氏 それは我々の責任です。この年代の責任なんです。責任を感じています。

司会 ここで関西民放クラブの新旧会長のご感想をお聞きしたいのですが。

<放送局、新聞社も「社員教育」をする余裕がないのか>

前会長 同じ会社でも斎藤さんとは割合すれ違いでした。(私の) 報道局長 5 年間の間に

「MBS ナウ」のキャスターは小池清と平松邦夫で、斎藤氏がキャスターをやった時は報道を離れていました。「あどりぶらんど」は編成局長の時に提案してきたが、営業局はそんなものやめてくれと言ってきた、僕は中身が分からないが、アナウンサー室がやりたいと言うのだから何でもやらせと言ってあの時は一応決めた、そんなことで今日は斎藤さんの話を聞きながら、僕もいろいろ考えさせられました。放送局、新聞社の上の人(幹部)と話す時には社員教育をやれと言っているが、そうはいかないようだ、社員教育はやってないね。僕らの若いころは教育の必要性を語っていた人はいたが、今はそういうことを言っている余裕がなくなったような気がします。

(別の出席者から、「だいたい若い人と一緒にメシを食ったりする機会が少なくなってきた」の発言)

食事でも一緒に行こうかと言ったら、今日都合が悪いという人が多くなった、我々のころは(上司に食事でもと言われ)連れて行ってくれるのがうれしくて、酒飲めたし、上と下の関係は割合よかった時代であったと思います。そういった関係がなくなってきたというので、この先が非常に寂しい、何かしないといけない、どうすればよいか、そういったことを感じます。

<多チャンネルを生かすためには 多様性と知的な興奮が必要>

現会長 (昭和 33、1958 年 ABC 入社。翌年 OTV が ABC と MBS に分かれ、ABC はラ・テ兼営局になる)

東京オリンピックが始まって(ラジオから)スポーツに異動が決まりました。

ちょうど 49 年前の 1964 年の東京オリンピックを下っ端で取材に行った、以後大体ずっとテレビの仕事をしてきました。斎藤さんが出演していた「ヤングタウン」は(ABC のほうは「ヤングリクエスト」というのを放送していたが)新しい形の若者層との向き合い方が新鮮でした。深夜のラジオ番組を聞く世代が増えてきて、しかもハガキ一枚でメディアに参加でき自分の意見を言えるという時代に入ってきたのだなと思いました。ABC の「ヤングリクエスト」はそういう意味では“ハガキで当てようクルマと一万円”ということで、ラジオそのものが遊び道具に使われ始めた時代だったと思います。それがより進化して、良い遊びの道具というか若者も(メディアに積極的に)参加していく参加型の番組に入っていたのが斎藤さんの「ヤングおー!おー!」(テレビ)でした。その時非常に活気あふれる画面を見ていて、確か日清食品のカップラーメン(番組のスポンサー)が映し出されていました。インスタント時代と言われていましたが、カップラーメンのいかにもおしゃれなカッ

プからお湯を注いでラーメンを食べるという、それが「ヤングおー！おー！」の若者のテレビ参加と一致していたような気がします。視聴率も30%くらいだったのでしょか。「ヤングおー！おー！」を何年おやりになっていましたか。

斎藤氏 半年くらい30%連続記録していたことがあります。
「ヤングおー！おー！」の一回目から足かけ7年やりました。

現会長 僕は在阪の番組は一度立ち上げると割と丹念に続ける、そこに番組の色付けも含めて工夫しながら進んでいくという制作スタイルがあったのではないかと考えています。僕も何本か番組を作りますが、ほとんど長寿番組でした。若者がテレビを遊びの道具として使いだした時代から今はテレビから離れてネットの世界に移ってしまっているのでしょう。

今テレビと言っても地上波があり、BSがあり、CSがありということですので300チャンネルを見ることが出来るようになってきました。ただ非常に多様な内容の番組が放送されて初めて、多チャンネルというものの意味があるのだと思っています。私は年齢的にもBSを見る機会が多い、少し落ち着いた番組を見たくてBSにチャンネルを合わせるのですが、地上波では特にバラエティー番組は見なくなりました。そのBSも多様性という点ではまだ十分とは言えません。

やっぱりこれだけの道具を持ちながら、そういう意味ではテレビに対してテレビで仕事をしてテレビでメシを食ってきたのに（何も引きついでこなかった）、今の作り手もテレビでメシを食っているのに、申し送りの部分がないのではないかという気がします。

我々はやっぱり多チャンネルをどういう風に生かしていくか、（このままだと）あれだけチャンネルがあっても無駄な部分を増やしてしまう、そこをどう工夫し知的な興奮を含めて多様な番組を作り、刺激を与えていくかがこれからの課題と言えます。ネットに関してはテレビがネットとどう融合しながら生きていくのか、各局とも模索していますが、なかなかいい着地点見出せないでいます。我々の時代はブラウン管の時代でした。ディスプレイは我々が作った番組を見る道具、その道具が今だんだん枯れてきた感じがしてきています。むしろネットのほうをうまく使わないといけない、ネットはいろいろな影響力があるものですから、新しい世代がテレビとの融合という点でどう工夫しながら使っていくのか、斎藤さんの話を聞きながらシンポジウムなど開いていろいろな刺激を与えていくことが大切やないかという気がしてきました。

司会 「ヤングタウン」が登場したような、「ヤングおー！おー！」がテレビに出てきたような、何かインパクトのある、フレッシュなものが現れないかなと願いつつ、今日

は例会を終わらせていただきます。

次回は12月4日（水）午後2時の予定。今年最終の例会となります。

この1年間あなたの心に残った番組を思い出していただき、ご自分のメモでも作ってご参加いただければありがたいと思っています。

【注】高橋信三基金助成金給付決定の経緯

＜申請書提出＞	4月下旬、
＜助成金給付内定＞	7月中旬、
＜助成金贈呈式＞	7月31日
＜調査・研究の目的＞	65歳以上の高齢者が国民の3割を占める10年後を見据えて「テレビ（放送）のあるべき姿」を聞き取り調査によって考察する。聞き取りの対象は主として関西の民放出身の放送人（65～80歳前後）及び高齢者と放送について調査・研究をしている学者、識者ら約50人。来年6月下旬には報告書を提出することになっている。その段階で調査・研究が終わっていなければ中間報告を提出（会計報告も）。2年目までには完結させることが求められている。

なお今年度の高橋信三基金への応募は18件、うち8件に対して助成金の給付が決まりました。

以上